

氏名	荒牧典俊 あらまきのりとし
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第161号
学位授与の日付	昭和59年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	南朝前半期における教相判釈の成立について

論文調査委員 (主査) 教授 梶山雄一 教授 服部正明 教授 竺沙雅章

論文内容の要旨

北朝後半期から隋唐期にかけて中国仏教が全盛期を迎え、各宗各派の祖師たちがつぎつぎに独自の教理もしくは宗旨を宣言していったとき、かれらはいわゆる「教相判釈」によって自らの根本的立場を確立したのであった。仏説として伝訳された多数の諸「教相」の順序次第を釈迦説法の意図に照らして「判釈」し「わが宗旨こそ釈迦の究極の真意だ」と討論し合った。中国仏教の根本真理は「教相判釈」によって確立されるべき歴史的必然性があったといえる。いったい、いかなる歴史過程をへて中国仏教はかく「教相判釈」によって自らの根本真理を自覚し、さらにその根本真理を実践的に体得するに至るか。

さて北朝後半期から隋唐期にかけての各宗各派の「教相判釈」の原型になったのは、北魏の洛陽遷都を機に南朝齊より伝来した劉虬『無量義経序』にみられる「教相判釈」であったと考えられる。南朝前半期における仏教思想史展開の結論ともいふべき劉虬の「教相判釈」が北朝後半期以後の仏教思想史の源流(の一)になるといわねばならぬ。本論文は、そのような中国仏教思想史の基本過程を解明するべく、まずは「南朝前半期仏教思想史の基幹プロセス」を論じて、以て南朝前半期仏教思想史がそれ以前の魏晉思想史展開の結論として問われるようになった、皇帝ならざる人間が「いかにして聖人になるか」——すなわち「いかにして文化創造の主体になるか」——の問いに答えていくものであることを指摘し、その問いに答えようとする支遁、慧遠、僧叡、(竺道生、)謝靈運などの諸思索が漸々に劉虬『無量義経序』へと完成されていくことを論証しようとしている。

最初の第一節では、西晋末八王の乱から永嘉の乱にかけての頃に政治の中枢にあった東海王越のサロンにおいて『莊子』的「逍遙遊」の実践が即ち「般若波羅蜜」行であることが思惟されはじめたらしい点を推察し、それが東晋前半期仏教思想へと展開していくことを論ずる。

東晋中期に政権を担当した何充・謝安・会稽王昱などを指導した支遁の思想において「逍遙遊」が即ち「般若波羅蜜」であることを確認し、かれの『釈迦文仏像讃序』なる一文にそれがどのような修行実践によって体得されるかを徴する。そこには、たしかに釈迦仏の仏伝にしたがって「安般守意」を修行実践し、易・老子・莊子などの聖人をも越える聖人になることが思惟されている——そして支遁自身もかかる「安

般守意」をこそ修行実践していた——が、しかし、いまだ釈迦仏が泥洹の後にも末世の人間にはたらきかけるのはいかにしてか、また末世の人間が修行して聖人になるのはいかにしてか、ということの哲学的根拠が解明されるには至っていない。

つぎに第二節では、東晋末期に廬山にあって厳格な僧俗修行集団を主宰していた慧遠晩年の二論著『沙門不敬王者論』と『大乘大義章』が同一の思想構造をもつことを論ずる。いうまでもなく前者は僧主桓玄の『道人応敬王』論に抗した論であり、中国思想の諸概念によって論ぜられている。後者は慧遠の切実きわまりない疑問に鳩摩羅什が根本解決を与えた往復書簡であり、仏教教理上の概念によって問答されている。しかしそれら両者において主張され問答されているのは、この時代の中国思想に課せられた根本問題「聖人はいかにしてわれわれ人間にはたらきかけるか」「われわれ人間はいかにして聖人になるか」であって、それらに対して鳩摩羅什によって「聖人は甚深法性によって衆生に説法し」「衆生は甚深法性をさとって聖人になる」という根本解決が与えられたのである。

つづいて第三節では、晋宋交代期にまさしくこの廬山教団を介して、長安よりの羅什仏教と法顕伝来の新仏教が会違したことを述べ、前者を代表する僧叡が羅什訳『法華経』も法顕等新訳『泥洹経』もともに仏説であることを弁じた名論『喩疑』をとり上げる。この論文こそ、さきの第一の問に対して、釈迦仏が『阿含』『般若』などの諸経を説法してから、いよいよ入滅するに際し『法華』と『泥洹』を説法したことを宣言して、教相判釈を基礎づけたものであり、そして第二の問に対して、羅什のいう「甚深法性」が即ち『泥洹経』の「衆生悉有」の「仏性」であることを承認して、いかなる衆生も仏という聖人になり得ることを決定したものである。

最後に第四節では、つぎの二点を補説する。第一、この時代の中国思想史の根本問題がかかる新来の仏教思想によって解決されたのを承けて、竺道生などがそれをさらに中国化して中国仏教思想を發展させ、その新仏教思想に根拠づけられて、新しい個々の人間を中心とする中国文化が勃興するであろうが、そのおそらく創始者ともいべき謝靈運について、かれの山水詩の文学がかれの『弁宗論』にみられる仏教思想に根拠づけられていることを論ずる。第二には、宋齊禪讓の後に貴族文化の中心人物として登場してきた竟陵王子良があらたに仏教活動を興隆しようとしたとき、再々にわたって「釈理に精しい」人物として招請したが果たさなかった劉虬の『無量義経序』に言及しておく。そこにおいて、上述『喩疑』以後発達してきた教相判釈及びいかなる人間も聖人になることを根拠づけた頓悟説が一つの結論に到達している。かかるかれの教相判釈と頓悟説こそが、直ちに北魏洛陽仏教へと輸入され、北齊仏教を経て隋唐仏教の教相判釈へと発達していくのである。

なお附論には、漢末以来学者・文人たちの思想表現の場であった易・論語・老・荘などの古典講義及び清談問答の礼儀が、仏教齋会の儀式における經典「転読」と融合していった、おそらく襄陽時代の釈道安教団において仏教の講経会の儀式が完成し、それが以後の仏教活動の中心になっていくであろうことを附説する。かくして成立してきた講経会第一日目の「開題」もしくは「序題」の主要テーマとしてこそ、教相判釈は発達していくのである。

論文審査の結果の要旨

著者は、本論文において、中国仏教がその真理を教相判釈によって確立したという事実の認識の上に立ち、その歴史的必然性を、支遁、慧遠、僧叡、竺道生、謝靈運、劉虬などの南朝前半期の仏教家の諸思想のうちに具体的に探り、それらの思想家に一貫する教相判釈への志向が隋唐期において完成する教相判釈的仏教への道を整えたことを論じている。

皇帝のカリスマ的権威に統合された儒家的な郡県郷亭里共同体であった漢帝国が滅んだのち、それまでの皇帝ひとりを中心とする文化と本質的に異なった、貴族など、ひとりひとりの人間を中心とするあらたな文化が展開し、貴族たちは、みずから皇帝でないにもかかわらず、ひとりひとりの人間として、いかにして聖人となり得るかを問いはじめた。彼らをはじめ『莊子』にその答えを求めたが、やがてかねてより呉において中国化しつつあった仏教を受容することのなかに答えを見出してゆく。このいかにして聖人になるかという思索が教相判釈を成立させてゆく、と著者は言う。

支遁は安般守意の実践をもととして『莊子』の逍遙遊が般若波羅蜜にほかならぬことを体得したが、なお、釈迦は滅後いかにして末世の人間に働きかけるか、末世の人間はいかにして聖人になるか、という問題を解決していなかった。『釈迦文仏像讚序』における仏滅に対する支遁の悲嘆がそれを示している、と著者は指摘する。著者は、慧遠が支遁と同じ構造の疑問に苦しみながらも、『沙門不敬王者論』において、王者ならざる出家が聖人となって、中国文化の継承者、創造者たり得ることの自覚に達したことを証明し、鳩摩羅什との間に交された書簡によって「甚深法性」のさとりが成仏にほかならぬことに目覚めてゆく過程を叙述している。

鳩摩羅什の甚深法性の仏教と法顕伝来の『泥洹經』の仏性・闍提成仏の仏教との会違が支遁や慧遠の疑問を一挙に解決し、やがて長安仏教の伝統を負って江南にきた僧叡において実を結ぶ。著者は、難解な僧叡の『喩疑』を解説し、そこにおいて甚深法性と衆生悉有の仏性とが一致させられ、一切衆生が仏陀の不滅の真我を学んで成仏し得るが故に大化の混びざることが明らかにされた、と言う。僧叡における、三蔵から般若、法華へと進み、『泥洹經』に極まる仏教の真理の発見が、中国における教相判釈の原型を形成したことをみごとに描き出している。

著者は竺道生の法身常在・頓悟の理論や謝靈運の『弁宗論』の思想に触れたのちに、劉虬の『無量義經序』を分析し、そこに五時七階の教相判釈が展開され、かつ、漸悟批判と頓悟成仏の主張がなされていることを紹介する。著者は、劉虬の七階とは人天乘・声聞乘・縁覺乘・大乘・無量義經・法華一乘・泥洹常住という展開であることを説明し、ここに中国仏教の教相判釈がほぼ完成するにいたったと論じている。

本論文は、魏晉の新思潮が仏教と結合し、支遁・慧遠の懷疑が『法華經』と『泥洹經』によって解決され、その上に立つ竺道生・僧叡・劉虬の思索が、中国仏教の基礎を教相判釈によって確立してゆく事情を明快に叙述している。一貫した論旨を豊富な文献の正確な分析によって裏付けることに成功し、すぐれた初期中国仏教思想史を成している。とくに僧叡の『喩疑』の解説と分析は著者の独創的業績である。

中国思想史一般の立場から見れば、皇帝のカリスマの没落を直接に仏教思想と結びつける著者の史観に問題がないとはいえず、同じように社会・経済史的事情と仏教思想とを短絡させることにも不安が残る。

また同時代における多数の仏教批判者の存在への顧慮が欠けていることを指摘して本論文を批判することもできるであろう。さらに仏教思想史としても、複雑な慧遠の思想をやや単純にわりきっている安易さも気にかかる。

しかしながら、それらの瑕瑾は、著者の透徹した中国仏教の哲学的理解に比すれば、さして大きなものとはいえない。教相判釈の思想史的必然性をここまで明快に論じた業績はほかには存在しないのであり、著者のその点における功績はきわめて大きいと言わなくてはならない。

以上審査したところにより、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。

昭和58年12月16日調査委員 3 名が試験を行った結果合格と認めた。